# 第１回　学校課題研究全体会

令和４年５月２３日（月）
藤小　研究主任　柿沼翔太
※昨年度からの変更点・追加点は網掛け

## １　研究主題

**全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学び（※1）と、協同的な学び（※2）の実現**

**～１人１台タブレットの活用を通して、３年間で段階的に（スモールステップ）～**
**【本研究は3年構想】　→　今年度2年目**

※１　個別最適な学びとは、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成することである。
具体的には、①「指導の個別化」と②「学習の個性化」に整理され、児童が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することが重要とされている。[1]
①「指導の個別化」とは、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことである。
②「学習の個性化」とは、子供の興味・関心・キャリア形成の方向性に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が自ら考え、学びに向かう姿勢が身につくよう、発達段階に応じた最適な学習ができるにすることである。
※２　協同的な学びとは、子供たちの多様な個性を最大限に生かすことである。
具体的には、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働(同)しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成することである。[2]

## 2　主題設定の理由

（1）今日的課題から

今世紀は知識基盤社会と言われており、社会の在り方そのものが劇的に変わるとされる「Society5.0 時代」の到来が予想されている。このように急激に社会的な変化が進む中で、学校をはじめ家庭や地域には、子供たちが社会の変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手として予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成することが求められている。そのため、文部科学省から GIGA スクール構想が発出され、ICT を基盤とした先端技術を活用して「子どもの力を最大限に引き出す学び」の実現を目指すこととなった。

GIGA スクールの推進により「1 人 1 台端末」や高速大容量の通信ネットワークといった ICT 環境が整備され、子供たちのみならず、教員の力も最大限に引き出すことが期待される。子供一人一人の反応を把握しながら、双方向の授業が展開できるのはもちろん、それぞれの理解度に応じた個別最適な学習が可能になるため、教師はよりきめ細かな指導ができるようになることが考えられる。また、学び合い学習では、1 人 1 台端末を使うことで、子供一人一人が独自の視点で情報を収集して整理、分析ができ、それらを即時に周りと共有して議論する、主体的で協同的な学習の実現が可能となる。さらに、その過程は、情報の真偽を確認しながら考えを深めていくといった子供たちの情報活用力を養うことにもつながり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に大きく繋がっていくと考えられる。[3]

---

[1] 令和 3 年答申 p.17、教育課程部会における審議のまとめ p.2

[2] 令和 3 年答申 p.18、教育課程部会における審議のまとめ p.4

（2）本校児童・家庭・地域の実態から

本校児童は、全体的には明るく素直で、学習課題に対してまじめに取り組む自主性や、友達と協力して学習活動に取り組む協調性が身についている児童が多い。また、Wi-Fi 環境が整っている家庭が 9 割以上であるため、デジタルネイティブな児童が多く、日常的に何らかのデバイスに触れる機会が多い。しかし、学習に資料や情報を活用したり、自ら資料や情報を収集たりすること、また、自分の考えを言葉や文章で適切に表現したり、発表したりすることに苦手を感じている児童が多くいる実態がある。令和 2 年度の埼玉県学力・学習状況調査の結果から、上位層が少なく、下位層がやや多く、中位層と上位層の中間が最も多いことが分かった。これらのことから、本校児童は、与えられた課題には自主的に取り組むので全体的に基礎・基本的な能力は身につくが、主体的に学ぼうとする学習態度が身についていないためか、上位に伸びることが難しいのが

現状である。また、本校は特別な配慮を要する児童が多く、家庭への支援を必要とするケースが非常に多い。そのため、家庭の協力を得られ辛く、下位層の児童のボトムアップが難しいことも大きな課題となっている。

自ら考えたり、判断したり、表現（発表）したりするための有効な手段として、ICT 機器（1人１台タブレット）の活用が考えられる。また、1 人 1 台タブレットを活用することで個別に最適な学習が可能となり、自分自身の実態に合った課題に取り組めるようになることも可能となる。さらに、学び合い学習の場面で、1 人 1 台タブレットを活用することで、一人一人が主役となり、主体的に取り組むことが期待され、探究的な活動も可能となってくる。

---

[3] 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料ｐ.1～6

●R３年度の結果から　　**※別紙①　アンケート結果**

R３年度のアンケート結果は、藤小児童全体の約９５％がタブレットを用いた学習が好きという肯定的意見である。1 年目の取り組みとして、様々なコンテンツに児童が触れたことから、全体的なレベルが上がっている。また、タイピング技能も向上していて、多くの学習場面や学校生活の中で活用している。

家庭での活用も進み、連絡帳や予定の配信、家庭学習での活用、オンライン学習の実施が学校全体で定着してきた。

急速に活用機会、場面が増えたことから情報モラルを児童１人１人が身に着けることが必要。R３年度にも、タブレット又は家庭でのネット使用（タブレットやゲーム機）が原因でのトラブルが起きている。

●R３年度　６年生社会　　**※別紙②　授業のジャムボード　※別紙③　アンケート結果**

１年間通して、単元の学習はジャムボードを中心として、教科書や資料集を活用した調べ学習を行った。また、NHK for school などの動画を活用（自由に見てよい時間も作った）し、ノートの活用は単元のまとめ（見開き１ページ）のみ。児童アンケートでは、タブレット活用の方が学びが深まると回答した児童がほとんどであった。

また、単元テストの結果は、年間で業者単元テストの平均点を上回った。ノートを書くのが苦手な児童や学級の下位層の児童も学期末評価での C 評価が減り、全体的な底上げとなった。

（３）本校職員の実態から

本校は、全ての職員が何事にも積極的で前向きに取り組むことができる。また「チーム FUJI」を合言葉に、学年・学級の垣根を越えて、組織的に連携・協力して問題解決していくこともできる。近年若手教員が急増し、指導技術・理論等のＯＪＴの需要が高まっているが、若手育成のための人的資源・物的資源・環境整備が十分に整っていない現状がある。反面、若手教員はデジタルネイティブであり、ＩＣＴ教育の推進に大きな力となることが期待される。また、超過勤務時間が月間４５時間を超える職員が多く、中には月間８０時間を超える職員もいる実態があり、働き方改革を進めることが課題となっている。ＩＣＴ機器を使いこなせるようになることで、勤務時間の短縮に繋がることも期待できる。

●R３年度の結果から　　**※別紙④　アンケート結果**

R３年度は、全学級で、ICT 支援員さんに支援をしていただきながら、様々なコンテンツを活用できた。アンケート結果から、職員の ICT 機器への関心は高く、肯定的意見が多い。しかし、苦手意識を持っている職員も一定数いる。

また、ICT 機器の活用により、職員の働き方改革にもつながっている。

## 3　目指す児童・教師像（３年後の姿）

（１）目指す児童像

ICT 機器(主に１人１台タブレット)を主体的に使いこなし、主体的(※3)・対話的(※4)で深い学び(※5)のできる児童。

（２）目指す教師像

ICT 機器(主に１人１台タブレット)を主体的に使いこなし、主体的・対話的で深い学びのある授業ができる教師。

※3　「主体的な学び」とは、学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげること。

※4　「対話的な学び」とは、子供同士の協働(同)、教職員や地域の人との対話、先哲の考えを手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めること。

※5　「深い学び」とは、習得・活用・探究という学びの課程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いやりや考えを基に創造したりすることに向かうこと。[4]

[4]　学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料ｐ.16

## 4　研究仮説（３年次構想）

（１）習得段階（１年次）　→　１年目の取り組みで児童・職員は日常的にタブレットを活用した。

〇ICT 機器（主に１人１台タブレット）を、意図的・計画的にかつ、日常的に教師も児童も使用すれば、学習の中で有効に使いこなすことができるようになるだろう。

☆キーワード「タブレットは文房具」

（２）活用段階（２年次）

◎今年度

〇個別の学び（個別最適な学び）や学び合い（協同的な学び）の中で、ICT 機器（主に１人１台タブレット）を、ツールの一つとして使いこなすことで、「主体的に学習に取り組む態度」の育成につながるであろう。

☆キーワード「タブレットはつながる道具」

（３）探究段階（３年次）

〇様々な学びの中で、ICT 機器（主に１人１台タブレット）をツールの一つとして使いこなし、主体性を発揮することで、「主体的・対話的で深い学び」が実現し、探究的な学習ができるようになるだろう。

☆キーワード「タブレットは研究道具」

## 5　研究方法

（１）研究のサイクルの確立　仮説→実践のプラン・デザイン→実践→省察→修正→実践→省察のサイクル

（２）アンケートの実施　集計→統計→考察→改善→実践

（３）研究授業の実施　全体会（年間３回実施）※外部指導者招聘、ブロック研究、個人研究、等

（４）研修会の実施　　全体会※外部指導者招聘、分科会、ミニ研修、等

## 6　研究の方策（実践のプラン・デザイン）

（1）習得段階（1年次）・・・・・・・・1年次の取り組みでは、さらに多く活用した。

〇ルーティーンワーク

毎日1回…ログインする。

毎週2回…ドリルパークを使用する。

毎週1回…ミライシードのオクリンクかムーブノートを授業で使用する。

毎月1回…Google フォームを使って小テストを実施。

毎学期1回…ミライシードか Google のソフトを使って、協同的な学習を実施。

年間1回…研究授業の実施。（自身でテーマを決める）

◎（2）活用段階（2年次）・・・今年度

〇ルーティーンワーク

毎日1回…　ログインする。

毎週1回…　ジャムボード・オクリンク・ムーブノート等で学び合う。

毎月1回…　Google フォームを使って小テストを実施

毎学期1回…ミライシードか Google のソフトを使って、協同的な学習を実施。

**年間1回…研究授業（自身でテーマを決める）**

**〇情報モラル・・・外部からの公演など連携**

**ルールの確立（昨年度の活用をふまえて）・・・生徒指導と連携**

（3）探究段階（3年次）

〇ルーティーンワーク

毎日必要に応じて…ログイン

授業に応じて…ジャムボード・オクリンク・ムーブノート等で学び合う

活用場面に応じて…必要なソフトやアプリ等のコンテンツを自ら活用

毎学期1回…ミライシードか Google のソフトを使って、協同的な学習を実施

年間1回…研究授業（自身でテーマを決める）

〇個人研究

自身の1年間のテーマを決めて、個人研究を行う。（研究授業とレポート）

**〇デジタルシティズンシップ　（情報モラルから次の段階へ）**

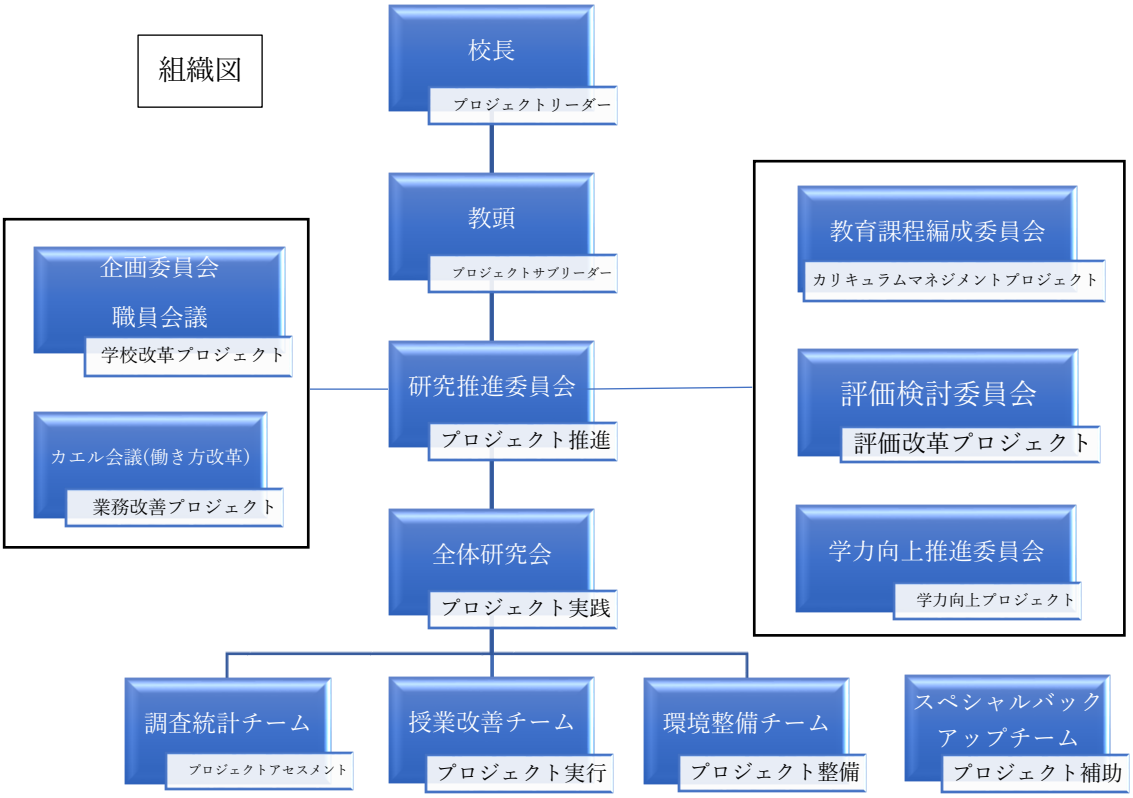
**お知らせ**　**ここはまだ検討中です。今後、皆さんのアイデアを吸い上げ、加除訂正していきます。みんなで考え、みんなで創り上げていきましょう！**

## 7　ICT 関連の研究・研修等の計画

| 学期 | 月日(曜日) | 活　動 | ●活動内容　【】推進者　★外部人材 |
|---|---|---|---|
| 一学期 | 4月7日（金）L | 校内研修① | ●Google の使用方法【教務主任・★ICT 支援員】 |
| | 5月2日(月)L | 第1回研究推進委員会 | 組織、進め方等の検討【研究推進委員長】 |
| | 5月23日(月)LL | 学校課題研究ブロック会①　校内研修② | ●研究の方向性、●【研究主任・★ICT 支援員】<br>●研究授業等の検討【各ブロック】 |
| | 5月下旬 | 児童・教師アンケート | ●アンケートの実施【調査統計チーム】※集計・統計・分析・考察を6月中旬までに |
| | 6月22日(水)L（予定） | 学校課題研究全体会①・校内研修③ | ●研究授業【5年2組：柿沼翔太・★ICT 支援員：　　？】、●研究協議【研究推進委員長】、●指導講評【★　　】 |
| | 7月下旬 | 児童・教師アンケート | ●アンケートの実施【調査統計チーム】※集計・統計・分析・考察を6月中旬までに |
| | 8月26日(月)L | 学校課題研究ブロック会②・校内研修④ | ●研究授業等の検討【各ブロック】、●タブレット活用研修【研究主任・★ICT 支援員】 |
| 二学期 | 9月上旬 | 児童・教師アンケート | ●アンケートの実施【調査統計チーム】※集計・統計・分析・考察を 10 月下旬までに |
| | 9月20日(火)L | 校内研修⑤ | ●タブレット活用研修【研究主任･★ICT 支援員】 |
| | 10月17日(月)L | 学校課題研究ブロック会③・校内研修⑥ | ●研究授業等の検討【各ブロック】、●タブレット活用研修【研究主任・★ICT 支援員】 |
| | 10月17日(月)LL | 学校課題研究全体会②・校内研修⑦ | ●研究授業【　年　組：　　・★ICT 支援員：　　？】、●研究協議【研究推進委員長】、●指導講評【★　　】 |
| | 12月中旬 | 児童・教師アンケート | ●アンケートの実施【調査統計チーム】※集計・統計・分析・考察・改善案を1月中旬までに |
| 三学期 | 1月30日(月)LL | 学校課題研究全体会③・校内研修⑧ | ●研究授業【　年　組：　　・★ICT 支援員：　　？】、●研究協議【研究推進委員長】、●指導講評【★　　】 |
| | 2月4日(土)L | 学校課題研究ブロック会④・校内研修⑨ | ●研究のまとめ【各ブロック】、●タブレット活用研修【研究主任・★ICT 支援員】 |
| | 2月中旬 | 児童・教師アンケート | ●アンケートの実施【調査統計チーム】※集計・統計・分析・考察・改善案を1月中旬までに |
| | 3月中 | 職員会議 | ●研究のまとめと次年度について【研究主任】 |

※個人研究（1人1授業）の取り組みの日程は各自で調整してください。（示範授業や指導訪問にあてても OK）

## 8　研究組織　　組織の主な分担は、授業改善チーム、調査統計チーム、環境整備チーム




組織一覧表

| チーム | チームスタッフ　　◎チーフ　〇サブチーフ | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 研究推進委員 | ◎柿沼 | 1 大山 | 2 唐島田 | 3 松田 | 4 山田 | 5 柿沼 | 6 井上 | 教〇野田 |
| 全体研究会 | ◎柿沼 | 〇野田 | 全教職員 | | | | | |
| 授業改善チーム | 1 大山 | 2 髙野 | 3 ◎松田 | 4 山田 | 5 柿沼 | 6 井上 | ふ内野 | 教〇大串 |
| 調査統計チーム | 1 大木 | 2 唐島田 | 3 濱中 | 4 倉持 | 5 ◎藤田 | 6 〇松元 | ふ鷹野 | 教瀬尾 |
| 環境整備チーム | 1 〇沼野 | 3 ◎川合 | 6 須田 | 教青木 | 教大澤 | 教野田 | す小井川 | |
| スペシャルバックアップチーム | 学習支援員、学級運営補助員、SSS、県費事務、市費事務、外国語専科、拠点校指導員、初任者代替講師、学校図書館司書、SC、算数学力向上支援員、ALT、ICT 支援員、PTA、学校応援団(SI) | | | | | | | |
| 学力向上推進委員会 | 教◎野田 | 1 〇大木 | 3 濱中 | 5 藤田 | 6 須田 | 教〇瀬尾 | | |
| 企画委員会<br>教育課程編成委員会<br>評価検討委員会 | 校長・教頭<br>教◎野田 | 1 大山 | 2 唐島田 | 3 川合 | 4 山田 | 5 藤田 | 6 井上 | 教　青木<br>ふ　鷹野 |
| カエル会議<br>(働き方改革推進) | 1 大木<br>沼野 | 2 高野 | 3 濱中<br>松田 | 4 倉持 | 5 柿沼 | 6 須田<br>松元 | 教大澤<br>大串、瀬尾 | ふ 内野 |
| 職員会議 | ◎校長 | 全教職員 | | | | | | |

## ９　昨年度の成果と課題（調査統計チームのアンケートから）

【成果】
・藤小の児童のタブレットへの意識や興味、関心の度合いを知ることができた。
・アンケート調査も紙面からファームへと変化することができた。
・集計も簡単にできるようになった。
・アンケート結果から次年度への課題が見えた。
【課題】
・タイピング教室や検定を実施することができなかった。
・来年度は、教室や検定を実施し、児童のタイピングが速くなりたいという願いに応えていきたい。
・アンケートも年間計画を立て、２回実施し、児童の変容が見られるようにしたい。

## １０　研究授業（全体・ブロック）での役割

※各ブロックで分担をお願いします。
研究授業
①　授業者【　　】
②　記録（タブレットで動画撮影　及び　授業写真撮影）【　　】
研究協議会時
③　協議会記録【　　】
④　学年の取り組み【　　】
⑤　研究協議司会進行【　　】
※全体進行【　柿沼　】

## １１　研究のまとめ

ブロック・学年・個人
①　各学年の取り組みについて（A４で１枚）　・・・　ICT 機器・学び合い・成果と課題
②　授業研究会全体会　及び　ブロック研究会について
・・・　デザインシート・協議会まとめ・指導講評
③　１人１授業の取り組み【個人研究】について（A4 で１枚）・・・　**※別紙⑤**

専門部
①　専門部での取り組み　及び　成果と課題

全体研究について
①　全体